

医療福祉連携講習会 実習報告書(例)

実習科目名	急性期医療実習（急性期病院）	実習施設	医療マネジメント病院
受講生登録 No	1 1 1	受講生氏名	熊本 花子
実習日	平成○年○月○日	報告日	平成○年○月○日
<p>報告内容：</p> <p>1 実習の目的</p> <ul style="list-style-type: none"> 急性期病院の現状を知り、地域医療における急性期病院の機能を理解する。 <p>2 施設の概要及び特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> 人口 10 万人の〇〇市の中心部に位置している。 社会医療法人 病床：一般 190 床（うち開放病床 23 床）、 診療科 16 科（総合診療科、神経内科、循環器科、小児科、外科、整形外科、形成外科、神経外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、放射線科、麻酔科） 救急告示病院、開放型病院、災害拠点病院、第二種感染症指定医療機関 〇〇二次医療圏において、病院が分担する機能は「救急医療対策」「災害医療対策」 救急患者は 24 時間受入れ、平成〇年度の救急者は 6,482 件、搬送受入数は 1,880 件 地域連携室は、外科部長が室長を兼務し、常勤は看護師 1 名、MSW2 名、事務員 2 名 昨年の紹介率は 62%、逆紹介率は 45% 循環器センターを有し、内に CCU には循環器内科、循環器外科の専門医がおり、循環器疾患に対する高度な心臓・血管手術及びカテーテル治療を実施している。 脳卒中センターを有し、脳外科、神経内科及びリハビリテーション科の専門医が、急性期から回復期まで一貫した治療を実施すると共に、登録医とともに脳卒中地域連携懇話会を定期に開催し、地域連携クリティカルパスの評価と見直しを実施している。 登録医等、近隣の“かかりつけ医”及び病院職員からなる「〇〇会」を定期的開催情報の共有及び研修を実施している。 災害拠点病院として、災害に備えた物資の備蓄を行い、救急隊との勉強会の開催、院内防災訓練、トレアージ訓練を実施している。 感染症対策委員会は、感染症統計・抗生物質の使用量の調査、高病原性インフルエンザ対策総合訓練を実施し、各種課題の分析、学習会の開催等を実施している。 医療安全管理会議はインシデント・アクシデントの集計・改善策の検討を行っている。 <p>3 実習の場所</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域医療連携室、救急部、検査部、放射線部、手術室、ICU、リハビリテーション部 <p>4 実習の日程</p> <ul style="list-style-type: none"> 9:00～9:30 研修室において、研究担当の〇〇企画課長及び△△看護師長から病院のオリエンテーション及び本日の研修日程について説明があった。 9:30～10:30 地域医療連携室において、〇〇室長から当院の地域連携の実際及び登録医の××会並びに脳卒中地域連携クリティカルパス等について説明があった。 10:30～12:20 救急部において、救急外来の実際を見学し、院内の連携システムに 			

ついて〇〇救急部医長から説明があった。

- ・ 12:20～13:00 昼食
- ・ 13:00～13:30 検査部において、△△生化学検査科長から緊急検査、血液検査、生化学検査、細菌検査、ECC 及び超音波検査等の生理学的検査の見学・業務の説明があった。
- ・ 13:30～14:00 放射線部において、××診療放射線技師から MRI、CT、血管造影等の見学及び業務の説明があった。
- ・ 14:00～14:30 手術室において、手術室の見学の後、〇〇看護師長から本日救急外来に搬送された患者さんの手術について説明を受けた。
- ・ 14:30～15:00 ICUにおいて、△△看護師長から ICU の概況説明があり、見学の後、緊急搬送後手術を受けた患者の事例について説明があった。
- ・ 15:00～16:00 リハビリテーション部において、××理学療法士から、部の概況説明を受けた後、理学療法室、作業療法室、言語聴覚室を見学した。

以上で、6 時間の実習は終了したが、研修室で 16:00～18:00 本日の概要をまとめた。

5 実習の内容

◎ ここでは、例示として「救急部」についてのみ、記してありますが、他の見学した部署についても、同様に、詳細に記載してください。

(1) オリエンテーション

.....

(2) 地域連携室

.....

(3) 救急部の概要

ア 救急外来

- ・ 救急外来には 5 つのブースがあり、救急搬送の患者の受入のほか、時間外の患者の対応も行う。
- ・ 時間内は、救急医 3 人、内科系医師 1 人及び外科系 1 人で対応している。
- ・ 時間外は、内科系、外科系及び小児科(21 時まで)各 1 名当直並びに麻酔科医はオンコール、看護師は 3 交代制(10 人)である。
- ・ 救急受付は、23:00 までは看護師 2 人と事務員 1 人、その後は事務員 2 人で対応する。
- ・ 夜間救急隊からの連絡は医師が直接受け、看護師は救急搬送・時間外受付担当とベッドコントロールの担当に分かれ、事務員はカルテ作成等を主に実施する。
- ・ 平成〇年度の救急患者数 6,482 人、内訳は総合診療科 2,082 人、小児科 1,400 人、整形外科 887 人、循環器科 791 人、外科 531 人、脳神経外科 280 人、産婦人科 224 人、泌尿器科 172 人、皮膚科 70 人、神経内科 43 人、眼科 1 人、耳鼻咽喉科 1 人である。
- ・ 事由：急病 4,826 人、一般事故 1,092 人、交通事故 203 人、分娩 189 人、その他 172 人
- ・ 救急搬送受入は平成〇年度 1,880 件、CPA は 68 人、原則として CPA は全て受入れる。

イ 見学した事例

- ① 10:40 70 歳男性、腹痛、38.3℃の熱があり、診てほしいと家族から電話があった。
 - ・ 救急受入担当看護師が氏名、診察券 ID、かかりつけ医療機関、診療科、患者の

生年月日、年齢、病状、来院の交通手段、時間等を聞き、当直医師に受入の可否の判断を仰ぎ、了解を取った。

- ・受入可能であることを、担当事務員から家族に連絡した。
 - ・患者到着までの間に、事務員はカルテ庫で患者のカルテを探し、救急外来に運ぶ。
 - ・11:00 患者・家族が自家用車で救急外来に来院した。
 - ・理学的所見及び血液検査、X-P 等で虫垂炎と診断され、緊急手術となった。
 - ・担当医から本人及び家族に手術の必要性及び手術について説明があり、同意を得て、同意書が作成された。
 - ・その後、麻酔医から麻酔について説明があり、既往歴、アレルギー、服薬中の薬剤、手術や麻酔の既往、最後に食事した飲食の種類・量、現在の状態等について問診し、本人・家族の同意を得て、麻酔の同意書が作成された。
 - ・手術の準備が整い、看護師が患者を手術室に搬送した。
 - ・救急外来看護師が救急受入のベッドコントロール担当看護師と調整し、病床を確保した。（当院では、毎日、夜間急患用に 17:00 時点で、原則 5 床の空床を用意）
- ② 11:20 72 歳の独居女性、居宅内居間で倒れていた。尿・便失禁、意識障害、自発呼吸有り、救急車から通報があり、医師が搬送受入を決定した。
- ・患者搬送まで、看護師が蘇生器具、点滴等を準備した。
 - ・患者搬送後、救急処置室で医師・看護師がバイタルサイン測定、DIV 確保を行った。
 - ・CT 検査等から、脳出血と診断、家族の同意を得た後、緊急手術が行われた。
- ③ 11:40 母親の実家に帰省中の 5 歳の男の子で、咳があり、呼吸が荒く、39.0℃の熱があるので診て欲しいと母親から電話があった。
- ・救急受入担当看護師が氏名、診察券 ID、患者の生年月日、年齢、病状、来院の交通手段、時間等を聞き、小児科医師に受入の可否の判断を仰ぎ、来院の了解を取った。
 - ・受入可能と、担当事務員から母親に連絡した。
 - ・患者は、これまで当院受診の既往がないため、到着までの間に、事務員はカルテを作成し、救急外来に運んだ。
 - ・11:50 患者・両親は自家用車で救急外来に来院した。
 - ・理学的所見及び鼻腔粘液検査、X-P 等でインフルエンザと診断され、抗インフルエンザ薬の処方があった。
 - ・院内で処方し、患者は両親と共に帰宅した。

ウ 救急部見学の感想

- ・上記 3 ケースを実際に見学することができた。
- ・受入から入院・帰宅まで全ての流れを見学できたわけではなかったが、救急医療について、患者に同行する形で、主要な一連の流れを見学することが出来た。
- ・手術の説明では、医師は本人・家族からの質問に十分答え、手術の必要性を説明しながらも判断を焦らすこともなく、ゆっくりと本人・家族が考える時間を与えていたところが印象的であった。
- ・看護師は、受診時から、付きっきりで、放射線撮影等にも同行し、時々声がけをし、

状況を確認し、不安を和らげていた。

- ・各部署の役割が明確化されており、それを実行することによって、スムーズで、効率の良い救急患者の受入が可能となっていることが理解できた。

(4) 検査部

.....

(5) 放射線部

.....

(6) 手術部

.....

(7) ICU

.....

(8) リハビリテーション部

.....

6 考察と感想

- ・今回の実習では、救急受入、救急外来からリハビリテーションまで、ショートレクチャーを受け、救急の一連の流れを見学することで「急性期病院の現状を知り、地域医療における急性期病院の機能を理解する。」という実習の所期の目的は達成できたのではないかと感じた。
- ・救急医療の最先端は、医療関係者の熱意と使命感により、辛うじて保たれているが、現状のようなハイリスクで、多忙な日々が続けば、我が国の救急医療は破綻するのではないかと感じた。
- ・軽症患者等のコンビ的な救急外来受診などを是正する、患者教育、マスコミ対策も必要であると感じた。
- ・限られた医療・介護資源を有効に活用するためには、救急隊並びに病院、クリニック、在宅療養支援診療所、訪問看護ステーション及び地域包括支援センター等福祉機関が各自の役割を果たすのは勿論のこと、患者や住民に対して、役割を明確にし、理解を求めると共に、機関間のネットワークの構築が必須であると感じた。
- ・今回の経験を日頃の連携業務にも活かし、地域のネットワークづくりに貢献したい。

実習施設指導者コメント：

必ず直筆のフルネームを
記入して頂くこと

施設指導者サイン ()